

## ロシアの国境政策と中央アジア諸国

湯 浅 剛

ロシアは中央アジアを含む旧ソ連地域の安全保障にとって主要な役割を果たし続けている。その主たる目的の一つとして取り上げられるのが在外ロシア人の保護である。ロシアはこのような名目の下で当該地域における軍事的プレゼンスを維持している。

さて、安全保障の領域におけるロシアの対中央アジア政策の諸特徴には、古くて新しい問題が残っていると見えるだろう。それは、国境を越えて進入する脅威をいかに食い止めるか、ということである。これには、より一層の厳格な国境管理のため、連邦保安庁

(FSB)、国境警備庁(2003年3月FSBに統合)、連邦移民庁(2000年5月、連邦問題・民族・移民政策省に移管。2001年10月の大統領令により同省は内務省に統合)といった関連省庁の再編問題もかかわってくる。報告では、S. バブーリンやD. トレーニンなど、ロシア側の国境・領土問題に関する主要な論調を例示し、また、国境法、市民権法、移民法などの法改正や関連大統領令の発出状況を整理することで、ソ連解体後のロシアの国境政策の傾向を論じてみた。

中央アジア各国の国境管理政策もまた、ロシアの市民権・移民管理問題に影響を与えている。このような旧ソ連諸国間の国境政策の相関性が、当該地域の「境界」のあり方そのものに変化をもたらしている。ロシアには、国家安全保障のために移民の流入を厳格に管理すべきか、あるいは労働人口の確保のためにこれを奨励すべきか、というジレンマがある。中央アジア各国、とりわけタジキスタンは、自国の経済事情から労働移民を送り出すことについてロシアと利益を共有している。ロシア政府は合法的な労働移民を歓迎している一方、特にプーチン政権の下で、査証制度や移民管理体制の改革による国境管理の厳格化から、非合法の移民を排除することをめざしている。大半の独立国家共同体(CIS)諸国は、ロシアとの二重国籍制を否定しているが、旧ソ連圏における境界概念と併せ、ロシアはこの二重国籍制を保ったままである。しかし、中央アジア諸国は、主権の維持という観点から、このようなロシアの影響力を取り除こうとしている。カザフスタンは、全人口の3割を占めるとされている国内のロ

シア人の存在から、この問題に関して脆弱な立場にあるといえる。2003年4月、トルクメニスタンではニヤゾフ大統領がトルクメニスタン領内での二重国籍制の廃止を一旦決定したことから、同国では二重国籍制がロシアとの間の取り扱いに注意を要する外交問題へと発展した。

ロシアの諸政策に見られるように、同国はソ連の国境政策の遺産を継承し続けている。プーチン政権は、ソ連のアウタルキー的な体制を維持するために構築されてきたFSBのような伝統的で官僚主義的ともいえる強制性の高い諸機関を、現存のロシア連邦の国境を守ることを目的として管理しなければならない。他方で、ロシアの境界をめぐる諸政策は、CIS諸国の中でグローバリゼーションの潮流に適用する上での主導的な役割を果たしているという、同国の立場を象徴しているとも言える。総じて、中央アジアを中心とするソ連解体後の境界構築をめぐる現状は、中央アジア諸国が新しい厳格な国境管理および移民政策を導入しようとしているなかで、ロシアは周辺の弱い国家あるいは破綻国家からの諸脅威に対する自国の安全保障の確保を進めている段階、と捉えることができる。

(防衛庁防衛研究所)

【付記】本報告を修正・加筆した論文が「ソ連解体後の境界構築の諸相：ロシアの制度改編と中央アジア諸国との関係を中心に」と題して日本国際政治学会の機関誌『国際政治』第138号（2004年）に掲載されました。詳細については、こちらもごらんいただければ幸いです。